

夏にさがる

講談社

加賀乙彦



夏ざるる 加賀乙彦

講談社

帰らざる夏

昭和四十八年 七月二四日 第一刷発行
昭和四十九年 一〇月二〇日 第八刷発行

著 者／加賀乙彦

発行者／野間省一

発行所／株式会社講談社 東京都文京区音羽二―一二―二 郵便番号 一一二
電話東京（〇三）九四五―一一一（大代表） 振替東京三九三〇

活版印刷／信毎書籍印刷株式会社

オフセット印刷／千代田オフセット株式会社

製本所／藤沢製本株式会社

© Otohiko Kaga 1973. 落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません。Printed in Japan

目次

第一章 夏の朝 5

第二章 幼年生徒 45

第三章 稚児 89

第四章 劫火 175

第五章 午陽 214

第六章 玉音放送 272

第七章 非常呼集 338

第八章 義軍 418

装帧
栗津
潔

帰らざる夏

第一章 夏の朝

1

暗闇のなかに白い柔い少年が横たわり、それを抱きしめた瞬間に明るい光がひろがった。何だか一時に輝くように目がくらみ体が震え、省治は目を覚ました。芯に詰っていた灰色の粘液がどこかへ流れ出てしまったように頭が軽い。が、明るい筈だと思つて見回したあたりはまだ暗く、枕元の腕時計をとつてみたけれども時刻は読めなかった。

といつてもう夜ではない。薄明りのなかに朝の物音がする。遠くで鶏が何度も鳴き、雀がかしましい。すでに今日という日は始つてゐるのだ。暑い夏の一日が今日もまた昨日と同じく続くにちがいない、暑い暑い一日が。実際、夜が明けたか明けないかなのにこの暑さはどうだ。体じゅうがねっとりした汗の膜で包まれている。ゆうべから何だか寝苦しくてよく眠れず、次から次へと夢を見ていたようだ。雪の降りしきるなかに城があり、城の奥へ奥へと入っていく先で、大変な光榮にあずかった夢、それからどこかの野っ原で隠れんぼした夢。

「もういいかい」と彼は呼んでみた。耳を警戒する兎のように立て、凝つと耳を澄ました。「もういいよ」とあちらこちらから返事があつた。一人一人の隠れている場所が聞き分けられた。三角山

の洞穴の奥、一本松の梢、散兵壕の底、そして蒲鉾型の射撃場の標的の下。

彼は走った。青空のもと、緑一色の野っ原だ。青空は黒っぽく星でも光りそうな夜の色だし、緑の草はまるで焰のように頼りなく、踏むと消えてしまふ。行けども行けども、だあれもない。青い厚い壁と、緑の壁との間にサンドウィッチにされた薄っぺらな風の中を、彼は走った。

三角山の洞穴に來た。闇が、いま墨を塗ったかのように半乾きに光っている。虫が一匹かすかに鳴き、なまぐさい土の臭がまつわりつく。ここで以前死んだ浮浪者が発見された話を思い出し、こわくて逃げようとすると土が崩れ、真黒な腕がぶら下った。黒い肉の割れ目に氣味わるく骨が光った。

彼は走った。めまぐるしく形を変える梢の間に、青空が、巧みな職人が素早く入れ替えていったように具合よく嵌^{はま}まっている。銀の縫針の枝が青空を引掻き、いやな音をたてている。日は高く星のように小さく見え地上の物の翳は硝子の破片のように不揃いで触ると怪我でもしそうな感じだ。

皮膚を切り開いた傷のように、生暖い血が溜った壕が幾条もあり、越えるのに苦心した。いや、その血の壕を越えることは不可能で、そこですべてがお仕舞いだという氣がした。それで立止り、氣がつくと彼は灰色の焼跡にいたのだ。

故郷の街が焼失した跡である。草もない、木もない、家もない、人々の姿も見えぬ。彼は「もういいかい」と呼んでみた。誰かが答えた。いや、声は聞えず意味だけが伝わってきた。みんな死んでしまった、ここには誰もいない、という。父も母も弟もいない、という。彼は呟いた、だあれもない、だあれも……

線香の匂や肉の焼ける臭が生温い空氣と混りあい、ふと、目の前に白い屍体を彼は見た。まるで生きているような裸の少年だ。どこかで見たことがあるが思い出せぬ。彼は少年を抱きあげ、抱き

しめた。屍体には違いないが幾分は生きていて暖く柔かい。そうして、明るい光がひろがり、彼は目を覚ましたのだ。

あの、少年は誰だったのかなと省治は考える。十三歳か十四歳ぐらいの、ほっそりとして可愛らしい子だ。ひよっとすると一年生の大塚四世という美少年かも知れない。白くて柔かくて、ほんとうに形のよいお尻だった。半透明の尻の中心には光輝く焰が燃え、少年があんなに白いのは内側から照らされていたからだ。

省治は寝返りを打った。下で固い藁蒲団が軋んだ。寝巻が汗でぐっしりと濡れ、褌が粘液でまみれている。躊躇なく起きあがると蚊帳を抜け出し、整頓棚から手拭と乾いた寝巻と褌を出して脇にかかえた。眠っている同室者たちを起さぬよう忍び足で自習室に出た。壁の電気時計は、偶然であろが、ぴたりと五時を示し、何だか柱に貼り付けた絵のようであった。廊下に来て軍帽をかぶり革の上靴を履いた。階段をおりると、喇叭手の部屋と週番士官の部屋に電燈が点っていた。そろそろ起床と点呼の準備をしていると見えた。週番士官が伊耶野少佐であることを思い出し、半開きの扉から中をのぞこうとしてやめた。自分が見つともない恰好で歩いているのが氣恥ずかしかった。

洗面所で手早く裸になり、手拭で体を拭い着替えをした。暖い水は、しばらく出していると冷たくなった。何だか光が増したようで見回すと、観武台と名付けられた小高い丘の頂きに赤い日が当たっている。澄んだ大氣を貫いて来た、率直な、やがては白熱していく夏の太陽だ。光と朝のざわめきに目を覚まされたのか油蟬が一匹鳴きはじめた。小手調べの断続音から、本鳴きへと移っていく。白い、暑い、夏の一日、きょうも一日壕掘りだらうか。伊耶野少佐の解説によれば、観武台の横腹を掘り抜いて、ジークフリード線みたいな要塞を構築するということだが、いったい敵の本土上

陸までに間に合うのだろうか。とにかく今日も炎暑のなかでの苦しい一日となるだろう。省治はあとに残っている夜気を吸い集めるような気持ちでしばらく深呼吸した。

寝台に横になったとき、起床まであと一時間足らず、何とか眠りたいと思った。しかし、頭が冴えてしまい眠れそうもない。目を瞑った。ふと夢の中の野っ原が戸山ヶ原にそっくりだと気がついた。焼ける前の東京の街の光景がまざまざと見えて来た。彼の生れ育った古い家がある。家の前の歩道を人々が歩いている。幼年学校生徒がいる。

2

幼年学校生徒を、幼い頃から、省治は見慣れていた。家の前の大通りを西に数分行くと幼年学校の正門があり、日曜日など外出した生徒たちをよく見かけた。

暖かそうなカーキ色の軍服を着、玩具のような剣を吊った姿を、石膏色の手袋と橡色つるばみの風呂敷包が引締めていた。数人が一団になってやって来、将校に会うとさっと一斉に右手で白い弧を描いて敬礼した。服装も挙措も水際立っている。彼らは何か特殊な選ばれた少年、遠い別世界から渡来した異人の子供のように思われた。彼らを見ると省治は、家の床の間のガラス・ケースの中のイギリス近衛兵を思った。黒毛皮の帽子に赤い軍服の近衛兵はまるで子供子供した薔薇色の顔付きで、しかもいかめしそうに立っていた。

別世界とは門の奥である。白い石柱を赤煉瓦で飾った門前には大きな相生樹あひおいずが茂っていた。一本の太い幹から生えでた二本の幹が榎と椎であり、この現象を相生と言うと教えてくれたのは父である。春になると榎の新緑がくすんだ椎の常緑と対照して美しく、そのあたりを父について散歩する

のが楽しみであった。門前からは東へ向う登り坂が通じ、それは椎の実坂と呼ばれていた。椎の実坂は、左手に幼年学校、戸山学校、陸軍病院などが並ぶ高台の裾をめぐっていくので、眼下には民家の低い家並が見渡せた。それはいかにも不揃いで、草の生えた瓦屋根もあれば朽ちたトタン張りもあり、二階の窓が光るかと思えば粗末な物干台に洗濯物が並び、全体として湿地帯に簇生した羊歯や苔のように複雑に連なっていた。坂の途中に石垣を圧した急な階段があり、或る日ひとりでそこを降りてみた省治は不意に暗い路地に入っていた。いわくありげで、何か病毒を含んだ空氣が濃み、しかしこわいもの見たさで先に進むと、意外にもそこはにぎやかな棟割長屋で、鹽に板をたてた女たちが道一杯に五色に光る石鹼水を流して洗濯していたり、数人の泥まみれの子供たちがベエゴマ遊びにふけていたりした。が、所詮省治は丘の上のお坊っちゃん、これらの貧しい子供たちの仲間に入ることには許されなかった。「下の子供たちと遊んではいけませんよ」が母の極り文句であったのだ。「あそこには人攫いのこわいおじさんが住んでいますからね」

だから下の街に来るのは母の躰に反すること、省治は緊張で身を堅くしながら迷路を歩いた。白濁して盲いた窓や崖っぷちから今にも陥落せんばかりに傾いた壁に熱心に目をくぼりながら、路地から路地へ走り抜けた。禁断の見知らぬ街であるが故に心たのしく、また面白く、彼は好んで下の街へ足をのぼした。めったに道に迷わなかったが、それというのも隙間のような小路の間からは、ほとんど絶えず丘の上の相生樹が道標のように高々と眺められたからである。それは不安な夢のなかに、いつも醒めた明るい部分があつて魔夢となるのをふせいでくれるようなものであった。

幼年学校の門内にはいつも人影がなかった。塵一つ無いまでに掃き清められた庭の奥に赤屋根に白壁の建物が童話めいた佇で立っていた。白い腰壁に蘇鉄と松の緑が鮮かに対照し菊の御紋章が純金の尊さを示すかのように燦然と光っていた。燦然という形容詞はその御紋章を言い表わす

ためにのみあるかのようで、それほどその輝きは省治の心を打ったのである。あの建物の中には宮様が住んでおられる、あれらの生徒たちは宮様の御学友なのだ、自分とは全く違う人種なのだ、省治はそんな思いでよく門のなかをこわごわ覗き込んだ。

いったいに省治の家の付近には軍関係の施設が多かった。それらは彼の日常の生活と深く係り合っている、それらを欠いた幼年時代というのは彼には想像もつかなかった。放課後や日曜日にはよく戸山ヶ原の練兵場に遊びに行った。もちろん一般人には立入り禁止区域であったけれど、入口に番兵がいるわけなし、それに中に入ってしまったえば広い原っぱや起伏のある丘や谷にはいくらでも身を隠す場所があった。日曜日となると子供ならまず自由に出入りできた。溝の底や叢を探って空の葉莢（やづきまう）を拾うのが楽しみで、みんな集めた葉莢を大切にポケットにしまいこんだ。家に帰ってきれいに洗い、紙鏝（やぐり）でピカピカに磨きをかけその多寡を競いあった。

練兵場にはみんなが三角山と呼んでいた小高い丘があった。この丘は線路沿いにまっすぐ伸びていて、その整った形や丁度練兵場の西端の境に長く走る具合から推すと省線電車の窓から練兵場への展望を遮るために人工的に造られたものかも知れない。笹藪の茂る斜面は所々が崩れて赤土が剥き出しそこが恰好の滑り台となっていた。丘の峰（お）には草隠れに細い道が通じており、そこに身をひそめながら往来する電車や散兵戦の教練をしている兵隊たちを見下すことができた。三角山は兵隊ごっこでは必ず必要な陣地となり、その争奪をめぐって激しい攻防戦がおこなわれるのが常であった。夏には捕虫網や鵜竿（うさだ）を手に蟬や蜻蛉を追う群が三角山の裾から始まる松林へと繰り入った。

油蟬（あぶらせみ）の聲の濃密さは夏の太陽の強烈さと釣合っていた。麦藁帽にランニング・シャツで子供たちは光と影の交錯する林の中を歩き回った。林は奥深く、ふと気がつくと仲間と離れてたった一人であることがあった。古い塹壕や錆びた鉄条網をよけているうちにみんなとはぐれたらしい。妙に静

かで蟬の音さえも遠くに去り、陽光も厚い枝葉にさえぎられて涼しい。苔むしたコンクリートの塀が半分がた倒れた形で続き、たどっていくと割れ目から塀の内側に入れた。高いコンクリートの壁に挟まれた、湿った空気のこもる陰気な場所、こわくなった省治は引返そうとしたが先へと誘う好奇心のほうが強かった。壁が切れたところで唐突に奇妙な場所に出た。半円型の大きな屋根が上を限り、その下の暗い道のはるかな先に明るい土手がある。みんなが《蒲鉾》と呼んでいる射撃場だと気がついた省治はしめたと思った。ここなら空の葉莢を沢山拾えるはずだ、拾えるだけ拾っていき大いに自慢してやろう。

が、思惑に反して一本の葉莢も発見しえなかった。平な射場はきれいに掃除されていたし、排水口の底に見付けた一本を取ろうにも金網が邪魔をした。結局あきらめて帰ろうとした省治は、ふと蒲鉾屋根の下を奥へと行ってみる気になった。風が吹き抜けて涼しく、足音が幾重にも反響して面白かった。どん詰りに土手があり、そこではほぼ完全な形を保った小銃の弾丸を見付けた。葉莢と同じ子供たちの間では弾丸の蒐集がはやっていて、もちろんゆがんだものより完全な形のもののほうが珍重されていた。捕虫網の柄で土手を掘ると、出るわ出るわ弾丸の山である。半ズボンのポケットはすぐ一杯となり、網の中に投げ入れているところで、いきなり嘔鳴り付けられた。

射場に一人の兵隊がいてしかも銃をこちらへ向けて構えている。彼は驚愕のため棒立ちになった。兵隊は銃をおろすとゆっくり近付いて来た。ほとんど泣き出したいのを抑えて彼は待っていた。肩章の星一つの二等兵である。戦闘帽の廂の影がいざって顔が見えた。笑っている。安心したと同時に省治は泣き出した。

「どうした。坊や。泣かんでもええ。おかしいぞ。そんなタマは持ってっていいんだよ。さあ帰んな。もう入ってきちゃ駄目だぞ」兵隊は省治の投げだした弾丸を丹念に拾うと捕虫網に入れてく

れ、しきりと慰めた。年をとった、彼の父ぐらいの人で、そんな人がなぜ二等兵でいるのかわからず、省治は不思議に思った。それに、丙種で兵隊をまぬがれた父よりも、はるかに小柄で貧弱な体格の人なのだ。とにかく省治は、思いがけぬ宝物を得たわけだが、せっかく集めた弾丸もなぜ友達に見せるのが気恥かしく机の抽出に仕舞ったままでいた。

或る夏、庭で遊んでいると玄関の呼鈴を押す人がいた。建仁寺垣の隙間から覗いた弟が「にちゃん、兵隊さんだよ」と甲高く叫んだ。二人は争うように木戸を押開いて玄関口へ走り出た。兵隊が二人母と話していた。「奥さん水をください」と頼んでいる様子で両手に水筒を抱えていた。母が勝手口に戻る言うに言う一人が「オウイ」と外へ呼ばわり、すると十数人の兵隊がてんでに水筒を持って現われた。行儀よく列を作って順番を待つその背中は一樣に丸く汗が染み出ている。誰も彼も同じく湯気の立昇る青々しい坊主頭で、それと対照して顔の黒い日焼が目立ち、面をかぶっているようであった。たちまちあたりには汗と革と男の臭が充満した。そんななかで水道栓を忙しく捻っている母の白い顔が美しかった。兵隊たちは省治たちに「いくつ」とか「何年生」とかありきたりの質問をしたが、こんな時物怖じせずに答えるのは省治のほうで省治ははにかんで黙っていた。歩道には鈴掛並木の翳が貼り付いていた。その円い翳の中に何とか入ろうと兵隊たちが身を寄せ合って蒼ざめていた。眩しい日射しの中には柵みたいな叉銃と堡塁みたいな背囊が置き忘れられてあった。大通りはがらんとして蟬の声が滑らかに流れていた。いっさいが夏で静かで物珍しかった。

いつも行進している軍隊ばかりを見馴れていた目にはそうして静止している兵隊や武器がとりわけて物珍しかった。ついに弟は背囊のそばにしゃがみこむとアーチ型にくくりつけられた毛布や飯盒を指先で触ってみた。そのおそろのおそろの手付きがおかしいと兵隊たちが笑った。自分も触って

みたかったけれど省治はわざと目をそらして隊の端へと歩いていった。

そこに将校がいた。肩章は中央の金線に星一つの少尉である。兵隊のように地べたにではなく床几に端正な形で腰かけていた。無帽の坊主頭は磨かれたように簡潔で、描かれたような目鼻立は兵隊たちよりずっと若く見えたけれども、利休茶の真新しい軍服と鏡のように道を映す黒長靴に犯し難い威厳があった。鈴掛の重い葉をそよがし風が鳴った。暑さにうだって寝ころぶ兵士たちの群と画然と離れ、この若き少尉は真夏の暑気をさます不思議な力を持つと見えた。省治は、幼い頃にどこかで見た菊人形の若武者に再会したような喜びにひたりながら、少尉の無表情な顔付を見詰めた。

家の前の、改正道路と呼ばれる広い舗装道路は戸山ヶ原の練兵場と代々木の練兵場をつなぐ幹線道路であったから軍隊の行進が絶えなかった。隊伍を組む兵隊が行き逢った将校に歩調を取って敬礼する情景を目にするたびに省治は将校の備える大きな力に感動した。

従兄の森山新助が陸軍歩兵少尉に任官した時省治は幼稚園の園児であった。実のところ、少尉の軍服を着て突然目の前に現われた新助を省治はてっきり変装姿だと思った。どこか軍隊の学校に行っていて日曜日や休暇の折には帰って来る年上の少年と新助を見做していた省治にはいつのまにか彼が一人前の将校として目の前にいることが不思議でならなかった。新助はいつも結城縞の着流しの小坊主みたいな姿でいて、省治にとっては気のおけぬ友達という感じであった。「新ちゃんはどうして軍人になったの」「どうしてって元々軍人の学校にいたじゃないか」「どこの学校」その時、新助の口にした幼年学校や士官学校という言葉から省治は椎の実坂の学校を連想できず、ただ不解な遠くの学校を思いうかべたにすぎなかった。新助は辛抱強く説明してくれた。多分、陸軍将校になるのは幼年学校に三年、予科士官学校に二年、士官学校に二年在学したのち、見習士官となりついで少尉に任官すること、予科士官学校に入るのには幼年学校を卒業するほか、中学四年又は五

年終了後受験してもよいこと、幼年学校に入学するには中学一年又は二年終了後受験することなどを教えてくれたにちがいない。新助には相手がほんの子供であることを忘れて難しい話に熱中するようなところがあった。むろん省治には複雑すぎてわけがわからなかったけれども、将校になるには大変な勉強をしなくてはならぬことは見当がついた。「じゃあ新ちゃんはシューサイなんだね」「シューサイか。おれはイシアタマだよ」石頭の意味を解さない省治は新助の五分刈りの頭を石でできてるような思いで不思議そうに見詰めた。

新助と椎の実坂界限を散歩した折に彼が「ここがおれのいた学校だ」と指差したことがある。その門や建物や生徒たちが、幼年学校という名前で統一され、しかもそれが軍服をまとった将校という映像と結びついたのはその瞬間である。ふだんから見馴れていた人形のような生徒たちは、鈴掛の下に威厳を保って坐っていた青年将校や森山新助という新任少尉と一本の太い線で繋がれた。「ねえ、幼年学校に入るにはどうすればいいの」省治は尋ねた。「うんと勉強するんだな」「うんと勉強すれば、ぼくでも入れる」「それはそうだ。おれだって入れたんだからな」この《おれだって》を、省治は皇族と無関係な一臣民の子弟だったの意味と解した。幼年学校生徒を何か特権階級の、又は外国人のような異質な血統の人々と考えていたのが急に身近なものになってきた。そして実のところ自分が幼年学校生徒にあこがれ続けていたことを思い知ったのである。

省治が小学校の四年生の晩秋、すでに中尉で中隊長であった新助が出征した。出発の前日、日曜日でもないのに来訪した新助はついに出征のことを一言も口にしなかった。あとでそのことを知った父は「いくら軍事機密だからといって新助も水くさいじゃないか」と言った。「母親や弟妹にも黙っていたさうですよ。いつも身の回りの世話をしている上等兵がお別れに来たのでわかったんですって」と母が苦笑した。赤襷を斜めにかけて、「祝出征」の幟を押立てた家子郎党のさかんな見